

研究の窓

女性と家庭と出生力

今回社会保障研究所が出生力低下と社会保障問題に関する特集を企画されたことに対して、心からお喜び申し上げます。出生力の問題については、これは元来私のいる人口問題研究所が過去50年間にわたって調査研究してきた課題で、例えばナショナルなレベルでの出産力調査は、1940年に第1回を行って以来今年の調査で第10回を数える。しかし、今日のように出生率低下とその社会経済的インパクトが国民的論議を呼んでいる時代においては、出生力をめぐる諸問題は、われわれのような一研究所の領分を超えて、多面的かつ学際的に広く論ぜられるべき課題となっている。社会保障という側面を通じて、出生力低下の問題に新しい光があてられ、新しい知見や仮説が生まれてくることを、大いに期待している。

今日日本の出生率がなぜこのように低くなったのかについては、人口学の立場からいろいろ論じられている。その結論のひとつは、とにかく要因というものがきわめて多岐にわたり、また重層的だということである。現在の研究方法、あるいは実地調査のやり方にはいくつの制限があり、真の要因を必ずしもうまく掬いとることができないうらみがあるが、今までの調査研究の蓄積によれば、長期的には経済発展、工業化、都市化、子どもの経済価値の低下、養育・教育コストの上昇、受験戦争、晩婚化、女性の就業等が挙げられよう。また短期的にこの10年間をみると、男女の晩婚化、出産適齢期における未婚率の上昇、そして非婚化という現象が圧倒的に利いていることが挙げられよう。

最近の先進国の出生率低下を考察してみると、多くの要因のなかでも最重要な次元は女性の社会進出であり、女性の役割の拡大であることが定説となっている。アメリカで当代随一の社会人口学者キングスレー・デービスによれば、女性の社会進出こそ20世紀最大の静かな革命といわれるべきもので、日本とても例外ではない。女性が外で働き、現金収入を得、自分のキャリアの開発を実現できるようになったことは、いわばエデンの園でイブが禁断の木の実を食べたことなのである。ひとたび禁断の木の実を食べてみれば、女性はもはや専業主婦として夫の世話と子どもの養育だけで一生を終わることに満足しなくなるのは当然である。女性の生き甲斐は、産業社会で男性と伍して立派に経済的役割を果たし、自分の手による現金収入を得たい、というふうに変わってくるのである。

そこで、女性はもちろん結婚もしたいし、子どもも産みたいが、女性の仕事と出産育児は普通両立しがたい。特に日本では、就業中の女性にとって、結婚・出産・育児の支援体制が不十分であり、そのため結婚を遅らせ、出産を遅らす傾向にある。一般にヨーロッパでは女性の就業と出

産育児が対立するが、日本ではその前の段階で、就業と結婚が矛盾することが多い。

日本で悲劇的なことは、結婚や家庭生活が女性にとってあまり楽しいものとは思われていないことである。独身のOLは盛んに海外旅行するが、これは一旦結婚したら最後、海外旅行をする機会がないからである。亭主は毎晩残業か接待で午前さま、土曜はゴルフ、日曜は疲れてゴロ寝である。単身赴任もあって、多くの家庭は母子家庭に近い。それに加えてあの恐怖の受験戦争はやって来る。こうしてみると、総務庁の調査によれば、ヨーロッパの女性に比べて、日本の女性が出産・育児を楽しいと実感する割合が格段に低いのは当然である。

どうしたら結婚、家庭生活、子育てをもっと楽しいものにできるだろうか。われわれがいつまでも職場に残っていたり、男どうして縄^{なわ}暖^の簾^{れん}をくぐったりするのも、ひとつは家庭があまり楽しくないからなのだろうか。たしかに住宅は狭く、レジャーをするにしてもアメリカと比べ^{べら}篋^{ぼう}棒^{ぼう}に高いが、それだけではない。物事を明るく考える視点がわれわれに欠落しているようだ。

河 野 稠 果

(この・しげみ 厚生省人口問題研究所所長)